

特集

街がもつとおもしろくなるブックガイド。

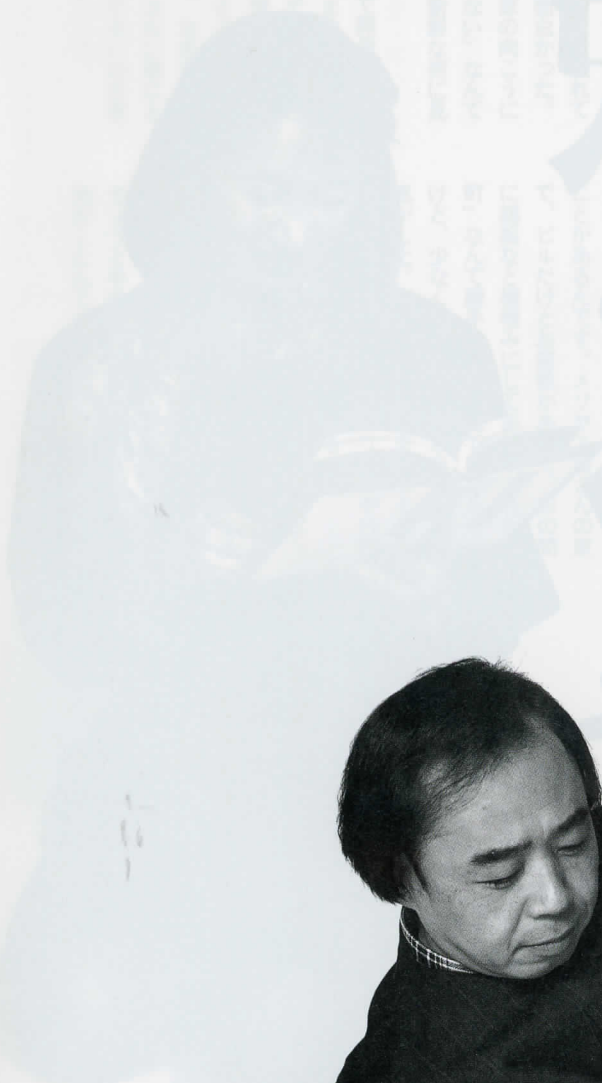
巷には東京に関する本があふれている。無駄な寄り道をせず、東京を理解し、都市を楽しむために——。建築、街歩き、演劇、スポーツ……。多様なジャンルと、江戸から、文明開化、モダニズム、昭和三十年代、バブルに至る時系列。「東京人」がお薦めする九四年版「東京の本」

東京を 読む。

野沢敏昭・写真
photographs by Yoshiaki Nozawa

毒み式

今世紀最大の木炭油、益木製



新釈トウキョウの 読み方。座談会

今橋映子、佐々木幹郎、鈴木博之
Talk By Eiko Imahashi, Mikiro Sasaki, Hiroyuki Suzuki

鈴木 千二百万人の住民がいれば千二百万の東京がある。たいていの人は自分が住んでいる界隈と職場や学校の周辺しか知らないわけですが、今日、明日と一点から一点までつながった線があり、それが何本か組み合わさって、都市のイメー

ジができてくる。みんな航空写真や地図でなく一筆書きで暮らしていて、その一筆書きが無数にあるのが結果として都市になると思っんですね。

佐々木 東京の読み方として、自分がいま現に住んでいて、手触りとしてどのへ



んが好きで、愛しいのか。土地や空気が水といった単純なものを手がかりにする必要があるですね。一般的に「住みにくい東京」から語るパターンがものすごく多い。不満はいくらでもいえるから楽なんです。でも不満をつなぎあわせたり、住みにくいと嫌いだという人口からは、東京は絶対に読めない。

今橋 「住みにくい」といえば、不幸なこと、私は生まれたのが高度成長期。公害、汚染といった

マイナスのイメージばかりで、東京はすこく住みづらいものの子どものときから叩き込まれてきたような(笑)。でも山の手

生まれ、下町育ちの母があちこち連れていって昔話をしてくれると面白かった。たとえば新宿駅で「焼け野原の向こうに富士が見えたのが忘れられない」なんて聞かされると、新宿が別の新鮮な街に見えたりしましたね。

佐々木 昨年、両国国技館で開催された建築家の大きな会合で、いま住んでる両国の魅力について話したんです。ところが、「両国はむかしからの記憶の層がたくさん埋まっっていて、いまもところどころ出ている面白いといっても、なかなか伝わらなかつた。要するに、きれいな事にとられたんですね。記憶の層がないのが東京、という割り切り方をしてくる。

鈴木 都市計画サイドの人が下町情緒を否定的にとるのは、戦争で焼け野原になり、碁盤の目に区画整理されて、「むかしの記憶は都市構造としては残っていない」となるんでしょう。

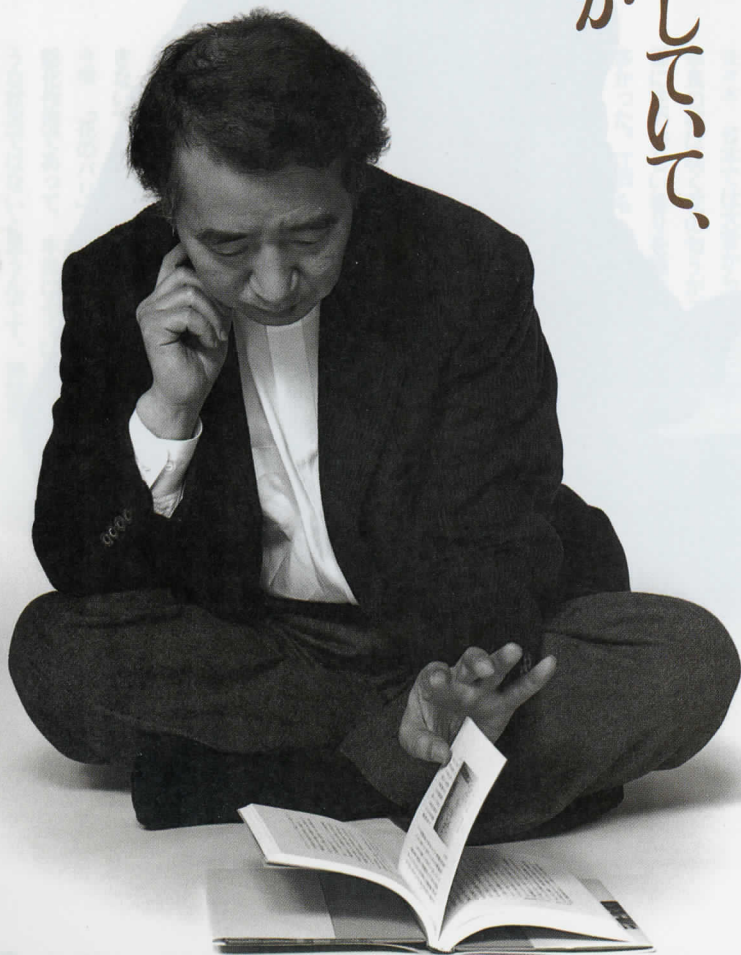
佐々木 と思います。しかし区画整理されて違う街並みになっても、髷がいくつもあつて、人間の生活そのものはそんなに変わらない。

鈴木 学生のころ両国で家庭教師をした

みんな一筆書きで暮らしていて、 無数に合わさったものが 都市になる。

ことがあるんです。メリヤス屋さんの家で、ビルだけとお座敷があつて、床の間に錦絵など横積みしてある。「これが下町」なんて勝手に思い込んでいたんですけど、少なくともそこに何かあるという気がした。ビルになり道はまっすぐになつても、同じようなメンタリテイや行動パターンが連続と続いている。

今橋 ふつう、東京は街自体が広いので、車を運転する以外は歩くより、地下鉄やJRの路線、何線でも乗り換えるとか交通網的な覚え方をするわけですね。ところがパリに留学したとき、東京と違って、ちよつと手のなかに入れられる都市の感覚がしたんです。つねにセーヌ河を真ん



中に、自分が右岸にいるか左岸にいるか、どっちに向かって歩いているか。エッフェル塔をみながらモンマルトルに上がり、カルチエ・ラタンに下がってくる、というふうにはつきりとした起伏があつて、自分が街のどの場所にいるかがすぐに確かめられる。

佐々木 日本だつたら京都がそうですね。鴨川中心に右京と左京。東山や大文字山を見て、道に迷つてもすぐ元へ戻れるようになつている。

今橋 上ル下ルとか、住所表記も似ていますね。

佐々木 ぼくは大学時代に京都にいて、その手のひらに乗る大きさがたまらなく苦しかった。もう、全部淀んでくるという感じがしたわけ。

今橋 大阪は手のひらに乗らないんですか。

佐々木 乗らないの。ただひとつの単純な台地の周りに坂があるだけで、あとはのっぺらぼうの埋め立て地という感じがする。もちろん北、南とかそれぞれ町によつてニュアンスが違いますけれど、歩いて面白い場所は限られている。東京は台地が七つもあつて、谷ごとに文化が溜まっています。谷ぎわには水も湧き出ますから、樹木も多い。大阪は本当に少ないんです。

鈴木 通天閣から梅田まで歩いたことがあるんですが、つまらな

佐々木幹郎

Talk by Mikio Sasaki

ささき みきろう 一九四七年奈良生まれ
大阪・河内平野で育つ。
同志社大学文学部哲学科中退。詩人。
詩集に『死者の鞭』『蜂蜜狩り』（高見順賞）、
評論集に『中原中也』（サントリイ字芸賞）、
エッセイ集に『河内望郷歌』『地球観光』
『カトマンス・テイ・ドリーム』など。
近著は『都市の誘惑―東京と大阪』
(TBSブリタニカ)。

いま現に住んでいて、
手触りとして
どのへんが愛しいのか。



ったな。単にスツと通り抜けたって感じ。
佐々木 大阪は歩く町でなく通りすぎる町なんですよ。歩いたという記憶が残るルートが少ない。

鈴木 天王寺駅から一心寺まで歩いていて骨仏にお参りし、そこから坂を降りてオートバイ屋の並ぶ道を越え、日本橋の電気街に歩いていったときは、なんとなく大阪がわかったような気がしたんです。でも、パリはついにわからなかった。シャンゼリゼを歩いていても、どうもパリという気がしない。放射状につくられた都市だからかな。

今橋 オスマン以前と以後がはっきりしていませんね。私が好きなのはサンジェルマン・デ・プレ教会あたりの入り組んでいて、どこに行くかわからない巡回空間みたいな感じのところ。古いヨーロッパの町が感じられて楽しいんです。
鈴木 言葉ができないせいもあるけど、つい道に迷ってしまっ。

今橋 迷ったときは、番地を見て番地が少なくなればセーヌ川に向かっていくわけですから。
鈴木 ああ、そうか。でも迷っていいんですけどね、こっちは。(笑)

佐々木 バリは最初女性名詞で途中から男性名詞になったんですか。

今橋 女性名詞が続いた時代があつて、七月革命(一八三〇)のときに雄々しいパリのイメージが詩や小説のなかでできて、男性名詞に変わってきたという経緯があります。

佐々木 東京はどつちだと思えますか。今橋さんにとって男性か女性か。

今橋 男性ですね。

佐々木 鈴木さんは絶対、東京は男性だと思っているんじゃないですか。

鈴木 そうです。

佐々木 でしょう。「本を読んでそう思った(笑)。「東京の地盤」は男の歴史としての東京。

今橋 佐々木さんは女性ですか。

佐々木 女性ですね。

今橋 大阪は。

佐々木 男ですわ。

鈴木 京都は女性でしょうね。

佐々木 ちよつとホモセクシャル(笑)。

京都人に怒られる。(笑)

鈴木 ぼくは京都は女性で、大阪と東京

あなたにとって、東京は男性ですか。女性ですか。

は「巨那と紳士」。男性だけど、男ぶりが連つというイメージだな。

佐々木 今橋さんは、パリを「花の都」と形容し続けるのは日本だけとお書きになつていましたね。

今橋 似たような言い方はありますけれども、「花の都」という定型的な表現は日本独特のものによつてです。

佐々木 日本では大昔から、「あをによし奈良の都は咲く花の匂うがごとく」などに花の芳しい香りを嗅ぐという比喻が多かった。江戸も「花のお江戸」。

鈴木 日本人にとってパリが世界の都でも誰が言い出したんですか。

今橋 起源ははっきりしないんですが、初出は、明治三十二年までさかのぼれます。詩では蒲原有明が最初ですけれど。

佐々木 少なくともひとつの花というイメージでたとえることは、もうとてもきないですね。

今橋 「花のバリ」というのもひとつの神話作用であつて、本当はそういえるような状況ではないと思つてます。神話化作用がいまは成り立たない時代という気がしますけど。

佐々木 少なくともひとつの花というイメージでたとえることは、もうとてもきないですね。

今橋 「花のバリ」というのもひとつの神話作用であつて、本当はそういえるような状況ではないと思つてます。神話化作用がいまは成り立たない時代という気がしますけど。

佐々木 近代の日本人は、やはりパリをみて都市をすこく意識したんだろうな。

今橋 面白いことに、永井荷風がいちばん典型ですが、パリに行った文人たちはほとんど帰国して江戸びいきになる。木下左太郎は、「パリには江戸がある。だから私はこの都を愛する」という。あらゆる記憶の堆積を抱えたパリを経て、東京に古い江戸がみえてくるんですね。

鈴木 成島柳北の『柳橋新誌』。後編はパリにいった後で書いているんですか。

できたのが大正十二年。そこでアジア化された西洋を味わって、東京に匂いを持ち帰ってくる。

今橋 北原白秋やパンの会の人たちをみると、高村光太郎のようにパリから帰ってきて加わる人もいれば、木下左太郎のように学生で加わる人もいる。それぞれ立場が違って同じ会を始める。西洋式のカフェ運動をやるうとする一方で、江戸情緒みたいなことを一所懸命考えたりするんですね。アジア的なものと西洋的なもので、自分たちがどちらにも近づけない、ひとつの距離感があつて。

鈴木 近代都市として、東京そのものが

今橋 あとです。

鈴木 とすればわかるし、そうじゃなかったら天才だ。(笑)

佐々木 「ふらんすへ行きたくしと思へども／ふらんすはあまりに遠し」の萩原朔太郎の場合、彼にとつて都市は、何よりもまず帝都・東京ですが、実際に前橋から上京して東京を描いたときに、もうひとつ別の、東京を超えた幻の都会のイメージが出てくるんです。『定本青猫』に海辺、時計台、停車場など銅版画の挿絵が

パリに行つた文人たちは 帰国して江戸びいきになるんです。 永井荷風も、木下左太郎も。

ありますね。これは、明治十八年に刊行された『万国名所図絵』などの木版画をそのまま使っているんです。ほくはそこに描かれたイメージのどこが西洋なんだろうと長いあいだ疑問に思っていた。ところが二年ほど前に初めて上海にいったら、挿絵の図柄が全部あつた。東京からいちばん近い西洋の町。そこは青永太郎、金子光晴のようにボヘミアン気取りの貧しい連中が簡単に行けるところだったわけです。長崎から上海までの定期航路が



今橋映子

talk by Eiko Imahashi

いまはし（えいし）一九六一年東京生まれ。

学習院大学文学部卒業後、

東京大学大学院比較文学比較文化専攻博士課程修了。

現在、筑波大学文学・言語学系専任講師（比較文学比較文化）。

著書に「異都憶懐 日本人のハリ」など。

江戸・東京に分裂していたからでしょうね。ことに社会制度や科学技術的なものでは、既存のもの両立しない西洋のシステムに乗らなければならなかった。ただ、そうでない部分、とくに建築は、伝統的なものを根こそぎにすることはできないから、どうしても残る。芸術もそうです。その面からみていくと、江戸から東京へは「封建制度は親の敵」というほど単純ではない層がある。

佐々木 上野の山は江戸城の鬼門の方角にあたっていて、寛永寺が据えられていたでしょう。江戸と東京のつながりかたが、あの台地の上じつにきれいに現れている。維新政府は江戸の守護神の場所に手を付けかね、美術学校や音楽学校などを中心に芸術パークにする。第一回の内国勸業博覧会もあそこで開きますね。

あれもやはり転換のサインだった。新しい国家のシンボルの場所につつ、江戸庶民の官軍嫌いを宥める場所となっていく。鈴木さんの『東京の地霊』を読んで面白いと思ったのは、彰義隊が立てこもって官軍が攻撃した際、逃げる場所を攻撃側でちゃんと用意していたこと。吾妻橋を通して向島のほうへ逃げる。

鈴木 三河島へ出たのもある。本隊は三河島からぐるっと回って護国寺へ結集するんですけど。

佐々木 いったん護国寺に結集し、そこからまた散っていく。方角的にずっと鬼門。

鈴木 あれは結局、最後は日光へ行くという意識が彰義隊にもあるし、官軍のほうも「どっそお帰り」。(笑)

佐々木 実際に歩いてみると、あの台地の上に開けた近代を感じさせられますね。

上野台地、それにつらなる諏訪台地。

鈴木 道灌山、飛鳥山。

佐々木 日暮里の朝倉彫塑館には、ヨーロッパの原者がずらりと彫刻のように壁面に並べて置いてある。朝倉文夫が全部本当に読んだのかと思つたら……。(笑)

今橋 岩村透から譲り受けていた。岩村が購入するときに朝倉文夫がお金を出し、岩村が亡くなり古本屋に売却された蔵書を買取った。奇妙な話です。(笑)

佐々木 朝倉文夫が自分で設計して、外国人が来て日本の文化を堪能できる家をつくらうとした。あの建物に入ったときに、庭も建物自体のつくり方も、これこ

そ日本の近代の受け止め方、東京に住む知識人の典型的な建物だと思ったの。

今橋 朝倉文夫は、結局ヨーロッパに行くことができなかつた。そのことも一因となつているんでしょうね。

鈴木 佐々木さんがおつしゃつたように、博覧会は江戸を東京に転換させる視覚的装置としてすばらしく機能したと思つんですが、面白いのが大阪。内国勸業博覧会は一八七七年、八一年、九〇年と上野で開かれ、第四回が京都で九五年、

佐々木 第五回が大阪の天王寺、一九〇三年。

鈴木 そのすぐ脇で住友が本邸を建てていて、ちょうど完成したときに博覧会が開催されるんですね。ところが見物に来た人などから物が投げられるわ騒々しくなるので、即座に住吉に本邸を移し、土地を大阪に寄付してしまつた。それが天

アジア的なものと西洋的なもの。

自分たちがどちらにも近づけない

距離感があつて。



人も建物も場所もつながら 何かがほしいですね。

王寺美術館、動物園、公園になる。大阪の悪口で申し訳ないんですが(笑)、あれで大阪が駄目になったというのが、ぼくの説。要するに、ビジネスは大阪ですけれど、住むのは首屋や住吉、阪神間という職住分離の先駆けとなつてしまった。そうみると、通天閣は博覧会の残映が尾をひいているように思えて仕方がない。

今橋 通天閣のような近代都市としてのビジュアルイメージは、東京ではどのようなものになりますか。

佐々木 都市の近代化ということに関しては、ぼくは二つのシンボリックな建築物を挙げたいですね。ひとつは駅で、ひ

とつは刑務所。どんな近代都市でも、最初に表玄関として駅をつくる。しかし、

集まってくるのは定住者だけではない。無数の浮遊する民が集まり、犯罪も起こってくる。

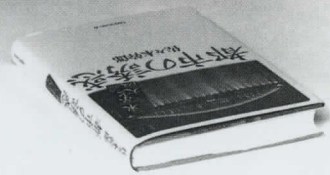
鈴木 受け皿が必要になる。(笑)

佐々木 東京駅すぐ近くの鍛冶橋に江戸期からの監獄があつたんです。その土地を払い下げて駅を作り、その代わりにいまの中野につくられたのが「東洋一の監獄」豊玉監獄。竣工は大正九年。東京駅が大正三年だから、ほぼ同時期です。レ

ンガづくりのドーム建築を、後藤慶二という天才的な司法省の技師が設計する。

鈴木 あのレンガは本当にきれいですね。いまは門しか残ってないけれど、アーチ門脇が楔型で、控え壁の仕上げも素晴らしい。

佐々木 時計台の横に十字堂房があつて、独房が並んでいた。戦前・戦中は思想犯専用で、埴谷雄高、大杉栄、三木清、河上肇、小林多喜二、窪川鶴次郎、中野重治、



亀井勝一郎など、みんな入っている。以前、独房で書かれた手紙や日記を読んでもみたくです。思想犯として収監された彼らはみんな監獄の建築としての美しさを讀んでいる。

今橋 建てられた当時は東京の周縁。佐々木 まったく周りに何も無い野原の真ん中。囚人がレンガを焼いて組み上げた。それと栃木県の……。

鈴木 上敷免製かシモレン製のレンガ。佐々木 そうそう。あのレンガはものすごく粒が細かく真っ赤で、いまつくれないそうすね。東京駅でも使われている。今橋 都市の施設としては、他に劇場やデパート……。

鈴木 「今日は帝劇、明日は三越」(笑)。

小さい差異にこだわりつつ、ゆるやかな結合性ができるばいい。

合でも、帰ってくる間にシラけてしまうところもある。

佐々木 客席の数が問題なんです。いま日本の若い劇団が見せるお芝居は一回に二百人から三百人が限度。ところが、その規模の劇場が少ない。

今橋 下北沢のあたりの本多劇場とか。

そうそう、佐々木さんは演劇がお好きでしたね。

佐々木 演劇に関しては東京は、若い劇団をみるのは若い層ばかり、お年寄りも帝劇、日生劇場とかで、世代によって全部横に切れてしまっている。これは都市演劇として大きな欠陥だと思うんです。ニューヨークやパリでは若い人から老齢層までひとつの芝居を楽しむ雰囲気があり、そのなかで劇そのものが力をつけてくる。東京も、江戸時代はそうだった。鈴木 ひとつには都市が急速に広くなりすぎたこともあるんじゃないですか。劇をみに二時間もかけなくてはならない。家族でいっても、では夕御飯をいつ食べるかなどと考えてしまっ。一人でいく場

佐々木 下北沢には他に、ザスズナリとか駅前劇場とか。あれは小さいから人が集まるんですよ。それに芝居のはねた後に寄れる飲食店が多いのが、あの町を演劇の町にしている。そんなふうには、小さな箱が各地に散らばってれば個性も出てくるんだけど。

鈴木 大きな箱が中心地にあっても集客能力に堪える劇でしか使えない。

佐々木 江戸期から伝承されている木遣り歌でも都内に散らばっている各組によって方言が違いますが、やはり小さく区分けされて初めて町全体の個性、顔つきができてくる。のっぺりとした、同じような構造を被せても逆効果にしかならない。

鈴木 演劇に限らず、人も建物も場所もつながる何かがほしいですね。小さい差異にこだわりつつ、ある種のゆるやかな結合性ができるというふうな。

佐々木 もっと東京って、音の少ないところ、多いところ、いろんなリズムがあつて然るべきだと思っんです。歩いてみると、視覚的に橋の色や装飾、欄干が単なる騒音に感じられることがあります。ひとつずつデザインされていて連携プレーになつていない。これは東京都への注文ですが、どんな小さな建築物にもデザイナーの名前を記して、誰でも良し悪しがいえるようにしてほしいですね。

今橋 バブルが弾けて、お金もなくなり、みんなが街を歩く機会が増えている。こういうときだからこそ、何が変わり何が変わっていないか自分の足で確かめ、そこから発言していくことが必要なんだと思います。●

鈴木博之

Talk by Hiroshi Suzuki

すずき ひろゆき 一九四五年東京生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。東京大学工学部教授・工学博士(近代建築史専攻)。著書に『日本の選択』(毎日新聞日本研究特別賞)、『建築の世紀末』(建築は兵士ではない)、『日本の現代建築1958-1983』、『夢のすゝ家』、『明治の洋館百選』、『建築家たちのワイクトリア朝』、『東京の地霊』(サントリー学芸賞)など。

発行人・小林節夫 SETSUO KOBAYASHI
発行・財団法人東京都文化振興会
〒108 東京都港区白金台5-21-9
東京都庭園美術館内
編集委員
芦原義信 YOSHINOBU ASHIHARA
柏谷一希 KAZUKI KASUYA
高階秀爾 SYUJI TAKASHINA
芳賀 徹 TORU HAGA

編集人・柏谷一希 KAZUKI KASUYA
編集・都市出版株式会社「東京人」編集室
〒102 東京都千代田区
富士見1-5-8大新京ビル3階
TEL:03-3237-1790

発売・教育出版株式会社「東京人」制作室
〒101 東京都千代田区神田神保町2-10
TEL:03-3238-6990
振替:東京4-111844

印刷・大日本印刷株式会社

編集
近藤大博 MOTOHIRO KONDO
笠原悦子 ETSUKO KASAHARA
鈴木伸子 NOBUKO SUZUKI
花崎真也 MASAYA HANASAKI
遠藤敏之 TOSHIYUKI ENDO
大嶺洋子 YOKO OMINE
出口三奈子 MINAKO DEGUCHI

アートディレクション・木村裕治 YUJI KIMURA
レイアウト・立花久人 HISATO TACHIBANA

レップ・伊藤正夫 MASAO ITO
制作/販促・関口征夫 ISAO SEKIGUCHI

●購読のお申し込みは、書店および発売元で承っており、バックナンバーをご希望の方は、上記発売元まで、小誌綴じ込みの郵便振替用紙または現金書留で直接お申し込みください。

- 「東京人」を扱っている首都圏以外の主な書店
- 札幌 紀伊國屋書店札幌店/旭屋書店札幌店
- 弘前 紀伊國屋書店弘前店
- 仙台 金港堂ブックセンター/丸善一番町店
前橋 煥乎堂
- 水戸 ツルヤブックセンター
- 新潟 紀伊國屋書店新潟店
- 金沢 北国書林香林坊本店
- 富山 清明堂書店/瀬川書店
- 長野 平安堂長野店
- 静岡 江崎書店/静岡谷島屋
- 名古屋 三省堂名古屋店/丸善名古屋店
- 京都 駿々堂堂宝店/アバンティブックセンター
- 大阪 紀伊國屋書店梅田店/旭屋書店本店/
旭屋書店難波店
- 神戸 ジュンク堂
- 岡山 紀伊國屋書店岡山店
- 広島 紀伊國屋書店広島店
- 福岡 紀伊國屋書店福岡店

- 「東京人」のバックナンバーを揃えている書店
- 千代田区 三省堂神田本店/岩波ブックセンター/
プレスセンター丸善/路書房/書泉ブックマート
- 中央区 八重洲ブックセンター F/銀座近藤書店/教文館/
福家書店銀座店
- 文京区 博山房書店
- 渋谷区 金港堂書店/金港堂書店2号店/旭屋書店渋谷店
- 品川区 リプロ大森/有隣堂大井町店
- 大田区 栄松堂書店蒲田店
- 世田谷区 鷹屋書店馬事公苑店
- 新宿区 西武新宿ブックセンター/三省堂都庁店/
芳達堂ラムら店/オーブックス
- 中野区 明屋書店中野店
- 豊島区 リプロ池袋店/旭屋書店池袋店
- 台東区 リプロ浅草店
- 墨田区 江戸東京博物館
- 武蔵野市 ブックスルーエ
- 保谷市 リプロひばりが丘店
- 大分市 開書堂

か つて「本を歩き、街を読む」という洒落た表現をした批評家がいきましたが、東京を歩く楽しさと難しさがあるように、東京を読む楽しさと楽しさを、歳を重ねると同時に痛感しています。

本誌では三度目のブックガイドになりますが、都市論、東京論は単なるブームではなく、巨大都市東京が生きつづけるかぎり、そこに生きている東京人は、それぞれの角度から、それぞれの世代から東京

への愛と憎しみのメッセージを送りつづけることでしょう。

この特集もそのためのお手伝い。読者の方々はそれぞれ自らの東京論・都市論の宇宙をつくっていただきたいものです。その宇宙が交錯し、スパークしてゆくとき、東京を舞台とした物語とドラマが豊かに開花し、実を結んでゆくこととしましょう。二十一世紀に向けて東京の文化的創造性、文化的成熟を期待したいものです。●(粕谷)

東京の職人

次号4月3日発売予定

特集 独自の高い技術を駆使して仕事をすすめる人々。その技と生きざまに迫る。

「バックナンバー」

●お申し込みは本誌添付の振替用紙をご利用ください。
●(白抜き数字は残部僅少です。)

1990年

- 4月号 ① 新宿が変わる
- 5月号 ② 東京を読む
- 6月号 ③ コドモたちの東京
- 7月号 ④ 東京の川を体験する/
- 8月号 ⑤ 東京は眠らない
- 9月号 ⑥ 都会で「迷子」のオナたち
- 10月号 ⑦ 江戸に旅する[品切]
- 11月号 ⑧ 東京から地球環境を考える/
池袋が変わる
- 12月号 ⑨ 新・東京ホテル物語[品切]

- 5月号 ⑩ 新版「江戸から東京へ」
- 6月号 ⑪ 東京のなかの一流旅行
- 7月号 ⑫ 建築を見に行こう/[品切]
- 8月号 ⑬ バスで東京を遊ぶ
- 9月号 ⑭ 荷風の散歩道
- 10月号 ⑮ 東京人とニュー Yorker が
出会うとき
- 11月号 ⑯ モダン東京盛り場案内
- 12月号 ⑰ 東京うまいもの屋さん列伝[品切]

1991年

- 1月号 ① 初詣は街歩きを始め/
東京湾の時代
- 2月号 ② 東京散歩学入門[品切]
- 3月号 ③ 東京くぼみ町コレクション
- 4月号 ④ 新宿発進/
- 5月号 ⑤ デパートは都市の遊び場/
- 6月号 ⑥ 書を持って街へ出よう/
- 7月号 ⑦ 東京に注文する
- 8月号 ⑧ 東京「自然」散歩
- 9月号 ⑨ 山手線各駅停車物語[品切]
- 10月号 ⑩ ハイテク江戸学[品切]
- 11月号 ⑪ 食は東京にあり
- 12月号 ⑫ 変わる東京ウォッチング

1993年

- 1月号 ① 映画の中の東京
- 2月号 ② 東京に住みたい
- 3月号 ③ 地図があれば東京が広がる[品切]
- 4月号 ④ 麻布・青山・六本木ストーリー[品切]
- 5月号 ⑤ 江戸東京博物館[品切]
- 6月号 ⑥ 皇居[品切]
- 7月号 ⑦ 漱石・鷗外の散歩道
- 8月号 ⑧ 大阪を見れば東京が見える
- 9月号 ⑨ 街はまるごと博物館
- 10月号 ⑩ 小江戸発見/東京近郊小さな旅
- 11月号 ⑪ 私鉄沿線物語
- 12月号 ⑫ 東京至る処に酒場あり

1994年

- 1月号 ① 時代劇が面白い
 - 2月号 ② 私説「東京100景」
 - 3月号 ③ 東京の学校
- 八重洲ブックセンターは3月11日(金)まで、
ソープン堂書店高田馬場店は3月31日(木)まで
「東京人」バックナンバーフェアを開催中。ご利用ください。

1992年

- 1月号 ① 買いもの探検記
- 2月号 ② 東京の四季に遊ぶ
- 3月号 ③ 地下鉄の達人になる[品切]
- 4月号 ④ 下町へいっしょい

1994 no.79

人 4 東京 TOKYO

特集

東京を読む。

新釈

トウキョウの読み方。

座談会

今橋映子×佐々木幹郎×

鈴木博之



建築・都市論 陣内秀信 / 江戸 北原亞以子

文明開化 池内紀 / 味 嵐山光三郎

街歩き 枝川公 / 自然 泉麻人 / 昭和三十年代 川本三郎

芸人 高田文夫 / 演劇 木村光 / モダン 久世光彦ほか。